

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

<b>Title</b>	「高程度」のマデ
<b>Author</b>	藪崎, 淳子
<b>Citation</b>	文学史研究. 50 卷, p.56-68.
<b>Issue Date</b>	2010-03
<b>ISSN</b>	0389-9772
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学国語国文学研究室
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

# 「高程度」のマデ

藪崎 淳子

## 1. はじめに

マデには、次のような程度を表す用法がある。<sup>(1)</sup>

- (1) 起き上がれる **まで** 回復したものの、まだ歩くことはできない。
- (2) 走り回れる **まで** 回復した。
- (3) 異常な **まで** 執着した。
- (4) 私が知っているのはそのへん **まで** だった。

(1)～(3)は、マデに後続する語句の表す状態の程度を表す点で共通している。(1)(2)は「回復した」程度を、(3)は「執着した」程度を表している。また(4)も「知っている」程度を表すものであり、(1)～(3)とともに程度用法のマデとして括られる。

このように、(1)～(4)のマデは程度を表す点で共通するものの、高い程度を表すホドに置き換えると、その許容度には差がある。

- (1) ??起き上がれる **ほど** 回復したものの、まだ歩くことはできない。
  - (2) 走り回れる **ほど** 回復した。
  - (3) 異常な **ほど** 執着した。
  - (4) ??私知っているのはそのへん **ほど** だった。
- 従って、程度用法のマデとして括られる(1)～(4)は、全く同質なわけではなく、いくつかのタイプがあると考えられる。

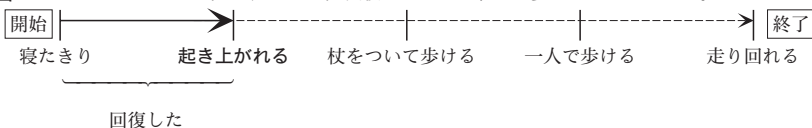
従来、程度用法のマデは議論の中心とされることが稀であり、当該用法の中にいくつかのタイプがあることはあまり指摘されていない。また、類義の他の形式との相違も議論されておらず、当該用法のマデの性質は、十分に明らかにされているとは言えない。

本稿では、程度用法のマデを分類し、高い程度を表す性質を有するマデ（以下、「高程度」のマデと呼ぶ）を考察対象として取り上げる。そして、同じく高い程度を表すホドとの比較を通して「高程度」のマデの性質を描出し、程度用法のマデの一端を明らかにしたい。

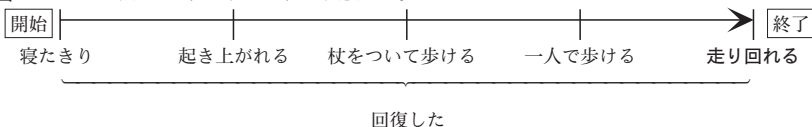
## 2. 程度用法のマデ

先にも見たように、程度用法のマデにはホドに置き換え可能な(2)(3)と、置き換え難い(1)(4)がある。これらのうち、(4)のような「マデだ」という形については、「低程度」を表す点で他の程度用法のマデと異なることが、丹羽(1992)に論じられている。(4)のマデがホドに置き換え難いのは、これが低い程度を表すため、高い程度を表すホドとなじまないからであると説明される。一方、(1)～(3)のマデの相違を指摘したものは管見の限りなく、ホドに置き換えた際の許容度の差を従来の記述から説明することはできない。そこで、この相違を考えるべく、(1)～(3)を図示してみよう。

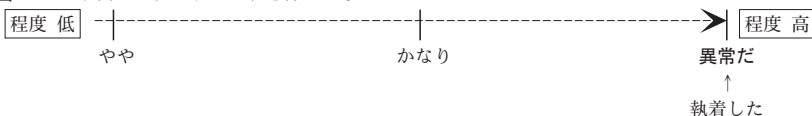
図A (1) 起き上がれる {まで/??ほど} 回復したものの、まだ歩くことはできない。



図B (2) 走り回れる {まで/ほど} に回復した。



図C (3) 異常な {まで/ほど} 執着した。



(1)からは図A、(2)からは図Bのような、「回復した」程度を表すスケールが想起される。そして、その「回復した」状態が、(1)では「起き上がる」程度に到達していることを、(2)では「走り回れる」という最も高い程度に到達していることを表す。一方、(3)からは図Cのような、「執着した」程度を表すスケールが想起される。そして、その「執着した」状態が、「異常だ」という、スケール上の最も高い程度に到達していることを表す。(1)と(3)は、マデが到達点を示し、後続の語句の表す状態の程度を表す点は同じである。しかし、(1)はその程度が最も高いことを表すものではないのに対し、(2)(3)は程度が最も高いことを表す点で相違する。従って、(1)のマデがホドに置き換え難いのは、高い程度を表していないためであると説明される。

このように、(1)と(2)(3)は高い程度を表すか否かという点で異なる。しかし、スケールの性質から、(1)(2)と(3)に分けるべきであると本稿は考える。(1)(2)のマデは「回復する」という時間の経過とともに変化する動的な状態変化を表すスケール上の到達点を示すのに対し、(3)のマデは「執着する」という時間の経過とは無関係な静的なスケール上の到達点を示す点で異なる。そして、(3)のように静的な状態の程度を表すスケールを想起させるマデは、常にそのスケールの最端を示し、最も高い程度であることを表す。これに対し、動的な状態変化の程度を表すスケールを想起させるマデは、スケールの最端を示して、最も高い程度であることを表す(2)のような場合もあれば、そうではない(1)のような場合もある。つまり、(1)(2)のマデは、漸次的な状態変化が累積した結果到達した点を示して、どの程度「回復した」のかを表すものであり、それが高い程度に達している場合にのみホドと置き換え可能になるので

ある。従って、本稿は(1)(2)のマデを「累積程度量」、(3)のマデを「高程度」として区別する。

ここまでから、程度用法のマデには三種あることが分かる。このうち以下の考察で取り上げたいのは「高程度」のマデである。なぜなら、当該用法のマデは常に高い程度を表す点でホドと類似しており、ホドとの比較を通してその性質を描出することができるからである。程度用法のマデの性質の一端を明らかにすべく、次節では「高程度」のマデとホドの相違を考察する<sup>(5)</sup>。

### 3. 「高程度」のマデとホド

2節における程度用法のマデの比較から、「高程度」のマデには、二つの性質があることが分かる。一つは程度を表すスケールの到達点を示すということ、そしてもう一つは後続の語句の表す状態が最も高い程度であると表すことである。以下では、ホドとの比較から、これら二つが「高程度」のマデに特有の性質であることを示す。

#### 3.1 「高程度」の表し方

当該用法のマデとホドは、後続の語句の表す状態に対する、話し手の程度が高いという評価を表す。

(5) 次の間の中央に、げげげしい（まで／ホド）あでやかに目にとびこむ色彩の寝具が、ただ一組とられているのを彼女は確かに見たのである。  
(検査の人びと)

(6) よこに避けたそのくちびるのはずれを、しびれる（まで／ホド）に強く、徳雄のくちびるが吸った。

(7) 私の席からでも、アリの異常な（ほど／マデ）の緊張は見て取れた。  
(一瞬の夏)

(8) 指さきのここえる（ほど／マデ）の寒さが、三月に入ってもなおしつこく、  
(焼け跡のイエス・処女懐胎)

(5)は、マデに後続する「寝具の色彩の」あでやかさの程度が高いという話し手の評価を表している。(6)のマデも、「くちびるを吸った」強さの程度が高いという話し手の評価を表す。ホドの場合も同じく、(7)は「(アリの)緊張」の程度が、(8)は「寒さ」の程度が、それぞれ高いという話し手の評価を表している。このように、マデもホドも、程度が高いという話し手の評価を表す点で共通している。

しかしながら、ホドの中にはマデに置き換え難い場合もある。

(9) 肺病の患者は、近所から立ち退きを迫られる（ほど／??マデ）嫌われていた時代である。  
(塩狩峠)

(10) 玉枝は、遠い竹神まで雪の道を押して墓まいりにくる（ほど／??マデ）父に愛着をもっていた。  
(雁の寺・越前竹人形)

(11) 国内では多く採れないとされた宝の発見に、時の聖武天皇も号を「天平感宝」と改める（ほど／??マデ）喜んだという。  
(朝日新聞2009年9月27日)

(12) これはとしに似あわないやさ男で、着物の衿が首をしめる（ほど／??マデ）ひき合わせてあり、あまいったるい声で、なにかを撫でるような話しかたをした。  
(さぶ)

(13) 栄二は心臓が止る（ほど／??マデ）吃驚した。  
(さぶ)

(14) 問題を作成したり、それを印刷することは、大した手間ではな

いが、答案の採点は、時には、死ぬ〔ほど〕??マデ〕辛い、と  
思うこともある。  
(若き数学者のアメリカ)

(9)が表すのは、「嫌われていた」状態の程度が高いという、話し手の評価である。(10)も「父に愛着をもっていった」程度が高いという話し手の評価を表している。(11)～(14)も、後続の語句の表す状態に対する話し手の程度が高いという評価を表す点で、先の(7)(8)と同じである。にもかかわらず、マデに置き換えた際に、(7)(8)と(9)～(14)で許容度に差があるのはなぜであろうか。

その理由を考える上で、本稿はマデとホドに前接する語句に着目したい。なぜなら、マデとホドが表す程度が高いという評価は、「とても」などの程度副詞と異なり、前接語句と結びつくことによってはじめて表し得るものだからである。この前接語句に着目し、マデに置き換え難いホドの例を見ると、(9)～(11)と(12)～(14)では、その表す内容に相違するところがある。(9)～(11)のホドに前接する「近所から立ち退きを迫られる」「墓まいりにくる」「年号を改める」は、いずれも実際に実現した事柄を表している。一方、(12)～(14)のホドに前接する「首をしめる」「心臓が止る」「死ぬ」は、実際に実現した事柄を表すものではない。そこで以下では、マデに置き換え難いホドを二つのタイプに分け、「高程度」のマデとの相違を考えていく。

### 3.1.1 話し手の評価を基準とするマデ

本節では、マデに置き換え難いホドのうち、前接語句が実際に実現した事柄を表す(9)～(11)と、「高程度」のマデとの相違を考える。

まずは、マデとホドが相互に置換可能な(5)～(8)の前接語句を見てみ

よう。(5)の「けばけばしい」は、「寝具の色彩」のあでやかさ」に対して話し手が感じたことである。(6)の「しびれる」も、「くちびるを吸った」強さ」によって話し手が感じたことである。(7)の「異常だ」も「(アリの)緊張」に対して、(8)の「こえる」も「寒さ」によって話し手が感じたことそのものを表している。このように、相互置換可能なマデとホドに前接する語句は、いずれも話し手が感じた評価を表している。

次に、マデに置き換え難い(9)～(11)を見てみよう。(9)のホドに前接する語句は、「近所から立ち退きを迫られる」という「嫌われていた」ことによって実際に生じた出来事を表している。(10)の「墓まいりにくる」も「父に愛着をもっていった」ことにより実現した出来事であり、(11)の「年号を改める」も「喜んだ」ことにより実現した出来事である。このように、(9)～(11)のホドに前接する語句はいずれも出来事を表す。従って、これらのホドがマデに置き換え難いのは、前接語句が出来事を表すからであると考えられ、ホドがマデに置き換えられるのは、(7)(8)のように、前接語句が話し手の感じた評価を表す場合に限られることが分かる。このことは、「高程度」のマデに前接する語句が、「凄まじい(までの闘争本能)」「悲しい(までの悪臭)」「すっと鼻の奥にとおる(までかんばん)」「目鼻を突き刺す(までの悪臭)」「すっと鼻の奥にとおる(までかんばん)」「身動きできぬ(までに縛り上げられた)」など、指示代名詞の場合を除き、いずれも話し手が感じた評価を表す語句に限られていることから裏づけられる。

ホドは話し手の感じた評価だけでなく、出来事を表す語句も前接させることができるのに対し、マデは話し手の感じた評価を表す語句しか

前接させることができない。このことから、マデは話し手の評価を基準に「高程度」を表すことが分かる。<sup>(8)</sup>

### 3.1.2 到達点を示すマデ

3.1.1では、マデに置き換え難いホドのうち、前接語句が実際に実現した事柄を表すものとの相違を考えた。マデはホドと異なり、出来事を表す語句を前接させることができず、話し手の感じた評価を表す語句しか前接できない。このことから、マデが話し手の評価を基準に「高程度」を表すことが明らかである。本節では、マデに置き換え難いホドのうち、前接語句が実際に実現していない事柄を表す(2)~(4)と、「高程度」のマデの相違を考えていく。

(2)は、「(衿が)ひき合わせてある」状態が、まるで「首をしめる」ように高い程度であったことを表している。つまり、前接語句の「首をしめる」は話し手の評価である。(3)の「心臓が止る」も「吃驚した」状態に対する話し手の評価であり、(4)の「死ぬ」も「辛い」という状態に対する話し手の評価である。このように、(2)~(4)のホドに前接する語句は話し手の評価を表すといえ、この点では相互置換可能な(5)~(8)が話し手の感じた評価を表す語句を前接させるのと同じである。しかしながら、(2)~(4)のホドはマデに置き換え難く、(5)~(8)とは何らかの相違があると考えられる。では、その相違は何であろうか。

(5)~(8)と(2)~(4)は、前接語句が話し手の評価をそのまま表すのか、話し手の評価を虚構を用いて表すのかという点で異なると考えられる。(5)の「けばけばしい」は「(寝具の色彩の)あでやかさ」に対して話し手が感じたことであり、(6)の「しびれる」も「くちびるを吸った」強

さ」に対して話し手が感じたことである。一方、(2)の「首をしめる」は、「(衿が)ひき合わせてある」状態の程度が高いという評価を表すために用いた虚構である。(3)も「吃驚した」程度が高いという評価を、まるで「心臓が止る」ようだったと、虚構によって表している。(4)も、「辛い」という状態に対する程度が高いという話し手の評価を、まるで「死ぬ」ようだ<sup>(9)</sup>と虚構を用い、誇張して表している。このように、(2)~(4)も話し手の評価を表すものではあるものの、それを虚構を用いて表す点で(5)~(8)と相違している。「猫の手も借りたいほど(忙しい)」「目に入れても痛くないほど(かわいらしい)」「掃いて捨てるほど(ある)」といった、慣用的な表現に使われるホドも、同じく虚構を用いて程度が高いという評価を表すものといえる。<sup>(9)</sup>

ここから、(2)~(4)のホドがマデに置き換え難いのは、程度が高いという話し手の評価を、虚構を用いて表すために、評価をそのまま表す「高程度」のマデの性質と齟齬するためと考えられる。「高程度」のマデが、話し手の評価をそのまま表すことは、(2)~(4)のホドをマデに置き換えた場合、(2)では「衿をきつくひき合わせて実際に首をしめた」という意味合いに、(3)は「吃驚しすぎて実際に心臓が止った」といった意味合いにとれることからいえる。<sup>(10)</sup>

では、なぜ「高程度」のマデは、話し手の感じた評価をそのまま表さねばならず、虚構を用いて表すことができないのであろうか。それは、「高程度」の表し方に起因すると考えられる。2節で見たように、マデは到達点を示して程度が高いことを表すものである。そのため、評価を虚構に置き換えると、もはやそれは話し手の評価が実際に到達した先ではなくることから、なじまないであろう。一方、ホドは前接語句

が虚構を用いて評価を表すものでも構わないことから、到達点を示して程度が高いことを表すものではないといえる。こうした両形式の相違は、接続可能な指示代名詞の異なりにもあらわれている。

(15) やっと門がひらき、郎党風の男が用心ぶかく野太刀を握って顔を出した。京の変事があっていらしい、不意の来訪者には「こまで」用心しているのであろう。(国盗り物語)

(16) ウエーク島に於ける彼の体験によれば、日本内地も米軍に占領されているのであるから、まさかこれほどの食糧難であるとは考えられなかったのだ。(樞家の人びと)

「高程度」のマデは「ここ、そこ、あそこ」という、場所を表す指示代名詞が前接するのに対し、ホドは「これ、それ、あれ」という、事物を表す指示代名詞が前接する。<sup>(11)</sup> マデが場所を表す指示代名詞に接続するのは、2節で図示したように、程度を表すスケールを想起させ、そのスケールのどこに到達しているのか、空間的な捉え方で「高程度」を表すからであろう。一方、ホドが事物を表す指示代名詞に接続するのは、事物を引き合いに出すという方法で程度が高いことを表すためであると考えられる。だからこそ、前接語句は程度の高さを表し得る事物であれば、出来事でも、評価でも、さらにその評価を虚構を用いて表してもよいのだと説明される。<sup>(12)</sup>

以上、3.1.1、3.1.2で見えてきたことは、表1のように整理される。

【表1】マデとホドの前接語句の表す内容

前接語句の表す内容		話し手の評価	
		出来事	虚構を用いて表す
マデ	○	×	○
ホド	○	○	○

ホドの前接語句は、出来事を表すものでも話し手の評価を表すものでもよく、またその評価は虚構を用いて表しても、感じたままを表しても構わない。それは、ホドは事物を引き合いに出して程度が高いことを表すため、引き合いに出す事物、即ち前接語句は、程度が高いことを表すものでありさえすれば、特にその内容を問わないからである。一方、マデの前接語句は、指示詞の場合を除き、話し手の評価を感じたままに表すものに限られる。このことから、マデは話し手の評価を基準とし、到達点を示して「高程度」を表すことが分かる。

### 3.2 「高程度」の質

3.1では、マデとホドの程度の表し方の相違について考えた。本節では、両形式の表す程度の高さの質にも異なりのあることを見ていく。

2節で述べたように、「高程度」のマデは、後続の語句の表す状態が最も高い程度であることを表す。一方、ホドは最も高い程度であることは表さず、程度が相当に高いことを表すに留まると考えられる。このことは、次の例に明らかである。

(17) スルタン・バヤゼットひきいるトルコの大军は、小アジアのアンカラで、ティムールひきいるモンゴル軍と対戦し、完璧な(ま

で/??ホド)の敗戦を喫したのだった。

(コンスタンティノープルの陥落)

(18) 新しい天皇ご一家、特に皇后様を仰ぎ見る時、完全な(まで/??ホド)の美しさとお人柄を深くご尊敬申し上げ、平成時代の日の長からんことを祈る (朝日新聞1989年1月18日)

(17)(18)のマデに前接する「完璧だ」「完全だ」は、その語義に最も高い程度を表すことを含む。これらとホドはなじみにくく、またこれらに接続するホドの例は管見の限り見出せない。<sup>(13)</sup>従って、マデは後続の語句の表す状態の程度が最も高いことを表すのに対し、ホドは程度が最も高いことを表すものではないと考えられる。

このことは、ホドには程度が最も高いことを表していると言いはし、次のような例があることから裏付けられる。

(19) 細い山道は二人が並んで通るのもむずかしいほど狭くて、両方から伸びた草を踏分けて行くようだった。(青春の蹉跎)

(20) 彼女は店開きができるほどのビーズや千代紙やぬり絵やうつし絵や消しゴムなどをどっさり所有していた。(椽家の人びと)

(21) その眼は日本人には珍しいほど茶がかかっているし、(沈黙)

(22) おきぬに劣らないほど美しいのだ。(路傍の石)

(19)は「(山道の)狭さ」の程度が高いことは表している。しかし、「二人が並んで通るのもむずかしい」という以上に狭い道、例えば一人一人がやっと通れる道もあり、最も高い程度を表しているとは言えない。

(20)は「ビーズや千代紙」などの数量が甚だしく多いことを表している。しかし、数量にはここまでいったら最も多いという限界はなく、量の多さは表しても、その量が最も多いことは表し得ない。(21)は「(眼の色の)

茶がかかっている」状態が他の日本人に比べて程度が高いことは表す。しかし、欧米人などさらに「茶がかかっている」場合もある。(22)も「美しい」という状態が高い程度であることは表すものの、「おきぬに劣らない」は必ずしも最も「美しい」ことを意味しない。この(21)(22)が表す比較とは、そもそも比較対象同士の関係しか表さず、程度が最も高いことを表すものではない。

これらをマデに置き換えてみよう。

(19) ??細い山道は二人が並んで通るのもむずかしいマデ狭くて

(20) ??店開きができるマデのビーズや千代紙や(中略)消しゴムなどをどっさり所有していた。

(21) ??その眼は日本人には珍しいマデ(に)茶がかかっているし、  
(22) ??おきぬに劣らないマデ美しいのだ。

いずれも許容度が低く、やはりマデは程度が最も高いことを表すものといえる。こうした両形式の相違は、「数えきれないほど(多い)」「〜とは比べものにならないほど(立派だ)」のように、数量や比較における程度の大きさを表すのみで、最も高い程度であることを表さない慣用的な表現にはホドが用いられ、マデが用いられないことから言えよう。マデとホドはいずれも程度が高いことを表すものの、表す程度の高さの質は異なる。マデは程度が最も高いことを表すのに対し、ホドは程度が相対的に高いことを表すに留まる。<sup>(14)</sup>

### 3.3 相互置換可能な理由

ここまでの考察から、マデとホドは、程度の表し方と、表す程度の高さの質に異なることが明らかである。マデは到達点を示し、話



し手の評価を基準に、後統の語句の表す状態の程度が最も高いことを表す。一方、ホドは程度の高さを表し得る事物を引き合いに出し、後統の語句の表す状態の程度が相当に高いことを表す。

さて、ここで一つの疑問が生じる。上のように両形式が相違するのであれば、なぜ相互置換可能な場合があるのであろうか。

(5) 次の間の中央に、けばけばしい（まで／ホド）あてやかに目にとびこむ色彩の寝具が、ただ一組とられているのを彼女は確かに見たのである。（椽家の人びと）

(7) 私の席からでも、アリの異常な（ほど／マデ）の緊張は見て取れた。（一瞬の夏）

相互置換可能な理由を、ホドあるいはマデに二種あり、用法の重なる部分があるからだ、という論理で説明できないことは、ここまでの考察から明らかである。仮に、ホドには程度が相当に高いことを表すものだけでなく、程度が最も高いことを表すものもあり、後者がマデに置き換えられるのだとしよう。もしそのようにホドが最も高い程度であることも表し得るのであれば、語義に最も高い程度であることを含む「完璧だ」「完全だ」に接続できてもよいはずである。しかし、これらとホドがなじまないことは、3.2で見た通りである。やはり、ホドは程度が相当に高いことを表すに留まると考えなくては、説明がつかない。また同様に、マデに二種あるとの考えも成り立たない。マデが相当に程度の高いことも表すのであれば、「く」に劣らないほど美しい」のような比較など、必ずしも程度が最も高いことを表さない場合にもマデはなじむはずである。しかし、3.2で見たように、こうしたホドはマデに置き換え難く、やはりマデは程度が最も高いことを表すといえる。では、な

ぜ相違する両形式に相互置換可能な場合があるのであろうか。

再び、相互置換可能な(5)(7)を見てみよう。両形式に前接する「けばけばしい」「異常だ」は、程度が高いことは表すものの、「完璧だ」「完全だ」のように、最も高い程度であることは必ずしも意味しない。このことに鑑みると、程度が相当に高いことを表すホドがこれらに接続するのは自然といえ、むしろ程度が最も高いことを表すマデが、なぜこれらと結びつき得るのかを考える必要がある。

3.1.1で述べたように、マデは話し手の評価を基準とした「高程度」を表す。そのため、前接語句がその語義に最も高い程度であることを含まずとも、それが話し手の評価を表すものであれば、当該の状態は最も高い程度であるという話し手の評価を表し得るのであろう。「けばけばしい」「異常だ」などでも、程度が最も高いことを表すマデの性質と齟齬せず前接できるのは、これらが話し手の評価を表すものであり、またマデが話し手の評価を基準とした「高程度」を表すことから説明される。

マデは、「高程度」の表し方、及びその質がホドとは異なる。にもかかわらず、ホドがマデに置き換えられるのは、前接語句が話し手の評価を表す場合には、最も高い程度であるという話し手基準の評価を表しているとの読みが成り立ち得るからである。一方、マデがホドに置き換えられるのは、マデの表す「高程度」が、あくまでも話し手基準であるため、前接語句の語義に最も高い程度であることを含まない場合は、相当に高い程度を表すに留まるとの読みが成り立ち得るからである。

### 3. 4 まとめ

以上、ホドと比較しながら「高程度」のマデの性質を考察した。両形式は、まず程度の表し方が異なる。マデは話し手の評価を到達点として示し、程度が高いことを表す。一方、ホドは程度が高いことを表し得る事物、具体的には出来事、話し手の評価、あるいはそれを表す虚構を引き合いに出し、程度が高いことを表す。また、両形式は表す程度の高さの質も異なる。マデは程度が最も高いことを表すのに対し、ホドは程度が相当に高いことを表すに留まる。このように両形式は異質であるにもかかわらず、相互置換可能な場合がある。それは、マデの表す「高程度」が話し手の評価を基準としているため、前接語句の語義に程度が最も高いことを含まない場合には、程度が相当に高いことを表すホドとの相違が見えにくくなるからである。

#### 4. 「高程度」のマデと「極限」のマデの相関

3節で見たように、「高程度」のマデは、話し手の評価を基準に、到達点を示して、程度が最も高いことを表すという、ホドとは異なる性質を有する。では、なぜ「高程度」のマデにはこうした性質があるのか、このことを本節では考えたい。

マデの諸用法を概観すると、「高程度」のマデは、取り立て用法のマデの一つである「極限」のマデと性質が類似していることに気づく。<sup>15)</sup>

②3 名古屋のモーニングにはデザートまで<sup>16)</sup>ついてくる。

②3では、モーニングについてくることの意外性の強い「パンやコーヒー」などから、意外性の強い「デザート」へと、項目が序列づけられている。こうした項目のうち、最も意外性の強い「デザート」をマデが示すため、

極限的な意味が読み取れる。また、丹羽(2006:97)が「極端な段階に到達するという意味で程度性を含む」と論じるように、②3は「名古屋のモーニングは色々ついてきて豪華だ」といった事態の程度の高さも表している。

こうした「極限」のマデの性質は、「高程度」のマデと二つの点で類似している。一つは、いずれも程度の高さを表す点である。「高程度」のマデは後続する語句の表す状態の程度の高さを表すのに対し、「極限」のマデは前接語句と述語句の結びつきが表す事態の程度の高さを表す。両者は何の程度を表すのかという点では異なるものの、いずれも広い意味での程度性に関り、またその程度が高いことを表す点で類似している。そして、もう一つの類似点は、話し手の評価を基準に、当該の事態や状態の程度が最も高いことを表す点である。「極限」のマデは、意外性の度合いによって序列づけられた項目のうち、最も意外性の強い項目をマデで示し、極限的な意味を表す。この意外性による序列は、②3のように一般に共有されることもあるものの、次のように一般に共有されていない場合もある。

②4 来ないと言っていた太郎<sup>17)</sup>まで来た。

②4でマデの示す「太郎」が、「来た」人物の中で最も意外性が強いという評価は、一般に共有されているとはいえず、話し手によるものであることが明らかである。こうした例があることから、「極限」のマデは、話し手が、意外性が最も強いと評価する項目を示し、極限的な意味を表すことが分かる。一方、「高程度」のマデも、3節で見たように、話し手の評価を基準に程度が最も高いことを表す。このように、話し手の評価を基準に、程度が最も高いことを表す点でも両用法は類似して

いる。

以上のように、「高程度」のマデの性質は、「極限」のマデと類似している。成立順序は定かではないものの、両用法は相互に影響しつつ成立したと見てよからう。<sup>19)</sup>従って、「高程度」のマデに見られるホドとの相違は、当該用法が「極限」のマデと派生関係にあるが故のことで捉えられる。

## 5. おわりに

程度用法のマデの中から「高程度」のマデを独立させた議論は従来なされていない。しかし、他の程度用法のマデと区別することで、類義のホドとの相違も明らかとなった。話し手の評価を基準に、到達点を示して、後続の語句の表す状態の程度が最も高いことを表すという「高程度」のマデの性質は、用法の異なる(立場によっては品詞の異なる)「極限」のマデの性質と類似している。このことから、「高程度」のマデに特有の性質は、「極限」のマデと派生関係にあるが故のことで捉えられる。「高程度」のマデと「極限」のマデが類似した性質を有することはまた、程度と取り立てが、異質なマデの表す用法ではないことも示唆する。マデの他の用法の相関関係は別稿に期したい。

## 【注】

(1) この他、マデには「取り立て用法」と「限度用法」があると本稿は考える。「取り立て用法」は、マデの示す項目と範列関係にある他の項目との関係を表す用法である。「名古屋のモーニングにはデザイナーまでついでくる」では、言外の「パンやコーヒー」と、マ

デの示す「デザイナー」が範列関係にある。そして、いずれの項目も「名古屋のモーニングについてくる」という、累加の関係にあることを表す。「限度用法」は、マデが範囲の上限、あるいは下限を示す用法である。「仕事に応じて五千円から一万円まで支払う」では、「支払う」金額の上限をマデが示している。当該用法と他の用法との相違は、これまで指摘されていない。しかし、「五千円〜一万円」の範囲に含まれるいずれの額が支払われるのか不明確な点で「取り立て用法」と異なり、また「支払う」という動作の量を表すものではない点で「程度用法」とも異なる。

(2) ホドが高い程度を表すことについては、安達(2005)、井島(2008)に詳しい。

(3) 中古語のマデの程度用法については、小柳(2007)に論じられている。

(4) 「累積程度量」のマデには、(1)(2)のように漸次的な状態変化の結果到達した点を示して状態の程度を表す用法から、漸次的な動作の結果到達した点を示して動作の量を表す用法(魚目がつくまで焼く、日が沈むまで練習する)へと、いう広がりがあり、ホドにもクライにも置換可能なもの、クライのみ置換可能なもの、さらに他の程度を表す補助形式には置換し難いものなど様々ある。「累積程度量」のマデの一部は數崎(2009)で論じたものの、全体像と他形式との相違については、別稿で論じたい。

(5) 本稿でマデと比較するホドは、程度量が大きいことを表すものである。程度を表すホドと、量を表すホドの相違は、井本(2000)に詳しい。しかし、程度と量は連続的であり、程度量が大きいこ

とを表す点で共通することから、本稿はこれらを特に分けずに考察対象とする。ただし、次にあげるホドは高い程度を表すもの、考察対象とはしない。「磨けば磨くほどきれいになる」は、「磨く」という動作の量に比例して、「きれい」の程度が高くなることを表す。しかし、この用法はマデにはないため考察対象から外す。否定と呼応する「傲慢するほどよくない」も、「傲慢するほどいい」という高い程度を否定するものであるが、これもマデにはないため考察対象から外す。また「太郎ほど誠実な人はいない」「太郎ほど誠実なら大丈夫だ」も「太郎の誠実さ」の程度が高いことを表してはいる。しかし、前者は「他の人は太郎ほど誠実ではない」と他を排除することで「太郎が最も誠実だ」という意味を表す。また後者は「太郎ほど誠実なら誰でも大丈夫だ」ともいえ、前接語句は他の事物との比較対象である。従って、これらは前接語句との結びつき自体で程度が高いことを表すホドとは別のものと考ええる。なお、マデとホドの相違については井本(2004)の議論もある。

(6) ホドに前接する語句が実際に実現した事柄を表すものから、実際に実現していない事柄を表すものまであることは、丹羽(1992)、井本(2004)に論じられている。

(7) マデに前接可能な指示副詞「こんなに、そんなに、あんなに」も「感情的意味が関係していると考えられる(岡崎 2003:注10)」ものであり、話し手の評価を表すものといえる。また、「こう、そう、ああ」も、マデが後接する場合はいずれも「こんなに」類と

置換可能であることから、同じく話し手の評価を表すものと見てよからう。

・全体已はこの女の何処がよくって、(こう/コンナニ)まで惚れているのだろうか?  
(痴人の愛)

なお、マデノという形に限られるものの、マデの前接語句が話し手の評価を表すものに限られることは、小原(2007)の【資料】からも看取される。

(8) 考察対象を含め本稿の主張とは相違するところがあるものの、「高程度」のマデが話し手の評価を基準にしているという本稿と同様の趣旨の主張は、小原(2007)にもある。また、小柳(2007:121)が、中古語のマデの程度用法の多くは「ある評価(標象事態)を言語主体に抱かせるくらいの程度を対象(本体事態)が有するという表し方をする」と述べるのも、本稿が「高程度」のマデについて言わんとすることと同じであると考えられる。

(9) 瀬戸(1997:78)は「誇張法が典型的に現れるのは、むしろ、現実が、より正確には、ある現象をとらえる私たちの思いが、通常の表現(既成のことばの枠)では間に合わず、それをいっきに突き破ってしまう場合である」と述べる。程度が高いという評価を表す際に虚構を用いる場合があるのは、こうした理由に基づくものと考えられる。

(10) 「高程度」のマデの例に、前接語句が話し手の評価を、虚構を用いて表しているかに見える例がわずかならある。

・昼よりもいっせひろびろと、あきらかな庭のおもてに、隈なく照りとおる月の、土にしぶきをうつまで(に)芽えて、天より滝

津瀬のななめにながれ落ちる光のすじが、本堂の屋根にあたり、石段に飛び、爰元にふり布いて来て、

(焼け跡のイエス・処女懐胎)

これは、「まるで土にしぶきをうつかのように月が冴えている」といった意味を表しており、虚構を用いて話し手の評価を表しているともいえる。しかし、後述するようにマデは到達点を示すものである。このマデの性質を利用して、話し手が実際に「土にしぶきをうつ」と感じたかのように表し、「月が冴えている」様子を生き生きと描いた文学的表現と捉えられよう。

(11) ただし、「高程度」以外の用法はこの限りではない。「これまで続けてきた仕事」「これまで食べるのか」のように、時間量や極限のマデは、事物を表す指示代名詞にも接続する。また、「ここほど快適な場所はない」と、他を排除して程度が高いことを表すホドは、場所を表す指示代名詞にも接続する。なお、このホドと高い程度を表すホドの相違は、注5で述べた。

(12) 動詞句が前接する場合、マデは(6)のようなル形に限られるのに対し、ホドはテンス対立があることも、両形式の「高程度」の表し方の相違と関連すると見られる。

・7歳のころに藤子・F・不二雄氏へドラえもんの漫画本一巻分を丸写しして送ったほどの大ファン

(朝日新聞2009年9月11日)

マデは話し手の評価を、程度を表すスケールに位置づけ、それを到達点として示すため、コトの意味を表せば足りることからテンス対立がなく、ホドは出来事そのままを引き合いに出すためにテンス対

立があるのだと考えられる。

(13) 『新潮文庫の100冊』と『聞蔵II』(1985年1月1日〜2009年9月30日)を調べた結果、「完璧なマデ」は四例、「完全なマデ」は五例、「非常なマデ」は一例見出したのに対し、「完璧なホド」「完全なホド」「非常なホド」は一例も見出せなかった。

(14) 「高程度」のマデがホドに承接できるのも、両形式の表す程度の高さが異なるためであろう。

・彼はこの幼稚な絵がそれほどまでに自分を感動させる理由は、いったい何かと、不思議に思い、とまどい、考えこんでいた。

(エディプスの恋人)

程度が相当に高いことを表すホドに、マデはさらに、最も高い程度に到達しているという意味を付与できるため、接続するのだと考えられる。また、「こんなに、そんなに、あんなに」という、それ自体で程度の高さを表す指示副詞(益岡・田窪1988:39参照)に、マデが接続可能なことも同様に説明されよう。

・山本さんは、なぜあんなにまで郷土のために尽したのだろうか？  
あけすけに言えば、海軍の職権を以て郷土に尽したのでないか  
いか (山本五十六)

「あんなに」は指示対象が表すのと同等に程度が高いことを表すものであり、ホドと同様、程度が相当に高いことを表すものと考えられる。そのため、最も高い程度への到達という、さらなる意味の付与が可能なマデは接続できるのだと考えられる。一方、ホドはマデと異なり、「あんなに」類の他、「こう、そう、ああ」を含めた指示副詞には接続できない。その理由は断定し難いものの、

ホドはマデのような完全な非自立語ではない——ホドには体言としての用法もあるのに対し、マデにはそうした用法がない——ため、修飾成分として自立している指示副詞には接続できないのである。

(15) 取り立て用法のマデには「極限」の他、項目の累積量を表す用法（問題集の一番から五番までを宿題にした）と、低難度を表す用法（思ったことを率直に言ったまで）があると本稿は考える。

(16) 小柳 (2007:122) に「マデは、取り出した要素を最上位として示す極的な意味を有するので、〈極度〉を表し、極端さは意外さ・驚嘆などの情意を誘発しやすいために、それが評価となって現れるのである」とある。これは、本稿で言う「高程度」のマデと「極限」のマデが相関することを述べたものと理解される。

#### 【参考文献】

- 安達太郎 (2005) 「ほど」による程度構文と否定」『広島女子大國文』21、広島女子大学
- 井島正博 (2008) 「クライ・ホド・ナド・ナンカ・ナンテの機能と構造」『日本語学論集』4、東京大学
- 井本亮 (2000) 「連用修飾成分「ほど」句の用法について」『日本語科字』8
- (2004) 「誇張表現としてのホド構文」『日本語と日本文学』39、筑波大学
- 岡崎友子 (2003) 「現代語・古代語の指示副詞をめぐって」『日本語文法』3-2
- (2006) 「程度を表す指示副詞について」『大阪大学大学院文学研究科紀要』46、大阪大学

奥津敬一郎 (1980) 「ホド」——程度の形式副詞——『日本語教育』41  
川端元子 (2002) 「程度副詞相当句（節）「Pほど」について」『日本語教育』114

—— (2007) 「程度修飾をする「ほど」句の構造と機能」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房

金水敏・木村英樹・田窪行則 (1989) 『日本語文法セルフ・マスター シリーズ4 指示詞』くろしお出版

小原佳那子 (2007) 「形容詞に後接するマデノについて」『国文鶴見』41、鶴見大学

小柳智一 (2007) 「第1種副助詞と程度修飾句——程度用法の構文とその形成——」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房

瀬戸賢一 (1997) 『認識のレトリック』海鳴社

丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44-13、大阪市立大学

—— (2006) 「取り立て」の概念と「取り立て助詞」の設定について」『文学史研究』46、大阪市立大学

沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房

益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

藪崎淳子 (2009) 「格助詞マデ」の副助詞性について」『日本語文法』9-2

#### 【用例出典】

『CD-ROM版新潮文庫の100冊』『聞蔵II』